

第5部：シベリアの人と文化

私たちが訪れたネルカン付近には、ロシア人のほかに、日本人と顔形がよく似たエヴェンキ族やヤクート族が住んでいる。

同行のハバロフスク博物館のカルヤギンによれば、初めてコザックが訪れた一六四〇年当時、この地にはエヴェンキとウデヘ、ナナイ族が住んでおり、交易のためにヤクート族もやって来ていたという。このうちウデヘ族とナナイ族は、今はこの地では姿を見ることができない。

エヴェンキ族の遺跡

キャンプのそばの林の中で、木の枝にかけられたヒグマの頭骨を二つを見た。今から三十年以上前に、ここに住んでいたエヴェンキ族が残したものだという。気温や湿度が低いせいか、そんなに年月を感じさせない。

ピーターたちから、「ここにクマが来ないようにするための呪いだ」という意外な説明が返ってきた。北海道アイヌの人々のクマ送り（イヨマンテ）と同じく、何か儀式的な意味あいを感じたのだが、

このシベリアの森に生きる人々は圧倒的な大自然の中で、動物や木や岩や気象変化にも魂がある、という呪術的な世界観を抱いている。

たのではないかと思っただのである。

とすれば残されたクマの骨にも、もっと深い意味があったのではなからうか。それとも、合理的な社会主義体制の中で、そのような世界観を失ってしまったのだらうか。

エヴェンキ族は、別名ツングース族とも言われ、かつてはシベリア一帯に広く分布していた一大民族であった。田ソ連の人類学者ズーポフの著した「人類の謎をとく」（白揚社）によれば、彼らは元々シベリア南部に生活していたが、トナカイ飼育技術を身につけて北方に進出し、千数百年前にはシベリア中に広がったものだという。現在ネルカン付近ではエヴェンキ族は減少し、消滅してしまった集落もある。後に蒙古方面からやってきたヤクート族、そしてロシア人がこれに替わったのである。



▲別れの前の記念撮影 左前にピーターと奥さん・3人の子供



筆者
井上 信夫

昭和24年山形県飯豊町に生まれる。新潟大学理学部卒業、県内の教壇に立つが、かたわら魚類調査や子供たちの野外体験の指導にあたる。二年前に転職して、これらを本業とする。昨年からは世界少年冒険村のスタッフに加わる。

〈連絡先〉自然案内舎 ネイチャーワーク
新潟市寺山1丁目8-25
TEL(025)270-2010



▲エヴェンキ族が残したヒグマの頭骨



◀マヤ川右岸の岩壁のペトログリフ



▲人や鳥らしきものが描かれたペトログリフ

シベリア先住民の遺跡

私たちが訪れたマヤ川右岸の岩壁に、先住民が描いたペトログリフ（岩絵）が残されていた。今から約六千年前のものだという。ドロマイトの岩の表面に、赤い線でデフォルメされた人や鳥などが描かれている。

その時代に、このシベリアの地に生きた人々はエウエンキ族ではなさそうである。ズーボフの著書によれば、数千年前、後退する氷河の後を追うように北に進んだ別の民族がいた。今ではより北方の少数民族となってしまったユカギル族ではないかという。

シベリアの秘薬 モーミーヨー

川岸にボートをつけたピーターが、高さ四十mほどの岩壁を上り始めた。彼が採ってきた黒い樹脂状の小さな塊は、爪でようやく削れるほどの固さだ。このモーミー

ヨーを毎日少量服用すると、滋養強壮、外傷や骨折の薬になるという。少し口にしてみると、苦味の中にわずかに樹脂臭があり、いかにも薬効がありそうだ。ロシア人の学者は、昔のコウモリに由来すると言っているとの事だったが、私たちは山火事で岩石にしみ込んだマツの樹脂が変成したものでないかと想像した。

シベリアの子供たち

キャンプの三人の子供たちは、実にたくましく生きている。暑さ寒さや極寒の冬に耐え、蚊の群れにもめげず、大人たちと共に厳しいシベリアの大自然の中で力強く生き抜いている。六歳の長男ステイパンは、すでに手漕ぎボートを自由に操り、自分で木を削って様々な道具を作ることができる。

ロシアでは、旧ソ連時代から組織的なビヨネルキャンプの伝統がある。町場の子供たちも長期休暇には、親元を離れて自然の中でキャンプ生活を体験する。かつての思想的側面を除けば、学ぶべき点が多い。



▲ピーターが採ってきたモーミーヨー

キャンプを後に

九日間のシベリア奥地の生活はまたたく間に過ぎ、いよいよキャンプを後にする日が来た。ここからボートでマヤ川をさかのぼり、百八十km上流のネルカンまで向かうのである。奥さんのリユーヴァや子供たち、二人のスタッフが船着き場まで見送ってくれた。

エウエンキ族のリユーヴァは、顔形がよく似た私たち日本人に親近感を抱いたようである。彼らの「以前にハンティングに来たアメリカ人は動物を殺す事にしか関心を示さなかったが、あなた方日本人は違った。シベリアの自然や私たちの生活まで興味を持ってくれた。是非また来て下さい。」という言葉に感激し、再会を約束してボートに乗った。

ネルカンまではボートで八時間の行程だが、途中景色を見たり、釣りをしながら十時間ほどかかった。川面をあかね色に染める夕焼けは、たとえようもなく美しい。

夜十時過ぎに着いた時には、ネルカンは、薄暗やみに包まれていた。ここでピーターの仲間のロシア人の家へ一泊、翌朝例の小型複葉機に乗る。シベリア感覚に慣れたせいか、来た時のような不安は感じなかった。



▲スプーンを彫るステイパン



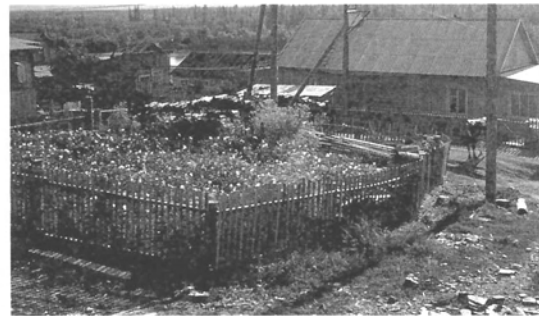
◀ネルカンのログの教会



▲マヤ川の夕暮れ



▲マヤ川の川原での昼食



▲ネルカンの家庭菜園 あらゆる家でジャガイモを栽培している

ネルカンの町並み

ネルカンは人口二千五百人、このあたりでは大きな町である。火力発電所があり、テレビが映る。ロシア人が来てから三百年以上の歴史があり、一八七五年に建てられたというロシア正教の教会もある。いかにも開拓地にふさわしいログの重厚な造りである。革命後は顧みられなかったが、ソ連崩壊後、屋根の十字架が復活した。

ネルカンの家々は、質素な造りであった。柵で囲まれた庭には、例外なくジャガイモが栽培され、砂利道には犬や牛がのんびりと歩いている。ただ、道端に放置されたキヤタヒラ付の錆びた大型車両やドラム缶などが、重工業中心のこの国の一面をしのばせた。

ネルカンには、様々な民族が住んでいる。空港までの私たちのトラックに便乗した女の子は、金髪碧眼だが顔だけはアジア人、島国の私たちには奇異に見えたが、ここではあたり前の事である。

水と緑が織りなす大自然

私たちを乗せた複葉機は、チュミカンで給油し、来た時の航路をショートカットしてハバロフスクまで一気に飛ぶという。四時間以上の行程である。チュミカンから南下して、アムール川支流のアームウニ水系に入ると、タイガは一面の湿原に変わった。見渡すかぎり蛇行する流れ、大小の湖沼群。最後の氷期が終わってから一万年近く、人が踏み込んだ形跡が全くない大自然が眼下に延々と続く。

川は自由に蛇行し、至る所に三日月湖を形成している。それが草原化したうす緑、さらに陸化が進化した濃い緑色、大自然が描く絵模様は、人工を排した荘厳な美しさである。

曲がりくねった三日月湖が茶褐色に見えるのは、ブランドンが繁殖しているためだろう。水が青く、蛇行部に白い河原を形成しているのは、今も水が流れている川である証拠だ。雪と氷に覆われる

厳冬期には、この風景は白一色に変ることだろう。

飛行機の機長から、この周辺の湿地や針葉樹の林に踏み込むと熱病にかかるという話を聞いた。小さなティック(ダニ)に刺されると、十日ほどして発熱、適切に対処しないと生き残っても中枢神経をやられるという。これは我が国でいうツツガムシ病と、ほとんど同じものだろう。

ハバロフスクにて

コムソリスクから先、山火事の煙がたなびく中を、まだ日が高いうちにハバロフスクに到着。日本は眼の前だ。再び私たちの苦手な町の中に舞い戻り、インツォリストホテルに泊まる。

ホテルにほど近いアムール川の河畔には、大勢の人々が憩い、水遊びや釣りに興じている。主たる獲物はコイのようである。

翌日、市内で土産物などを捜すが、これといったものはない。銃



▲帰りの飛行機から見たアームウニ水系の流れ

素顔のロシア人

ところで、ロシア人に対する日本人一般の評価には、過大な偏見が含まれているのではなからうか。環日本海圏構想が声高く叫ばれ、沿岸都市間で誘致合戦を展開している反面、新潟県のある港町ではロシア人入港お断りを宣言したという新聞記事があった。

砲店兼釣具店では、オオヤマネコやカワウソなどの毛皮が売られていた。もちろん我が国には、ワシントン条約に抵触して持ち込めない代物である。

書店で何冊かの本を買う。驚くほど安くいいが、店員の接客態度はうわさ通りである。買い方が分からずもたもたしていると、外国人だろうが何だろうがとなりつけられる。若い金髪美人が怒ると、何が鬼気迫るものがある。

店員にサービスピ精神が欠けるというのは、ほぼ当たっているかも知れない。国の顔である空港職員もわかりである。しかし、これでもロシア人そのものの特性ではなからう。長い前政治体制下で、

全ての労働者が公務員化・官僚化した結果であろう。社会制度の異なるこの日本ではどうだろうか。

また、ソ連崩壊後の物不足や社会混乱が指摘されているが、敗戦後の我が国の様子を顧みれば、同様な問題があったはずである。戦中戦後の悲惨さと困難を忘れ、物質的に恵まれ過ぎた飽食の国ニッポン、同じ尺度で他国を評価するのは危険である。

私たちが短い旅の中で接したロシアの人々は、皆気配りのある人間的な顔を見せてくれた。あの本屋の厳しい金髪美人も、家庭や仲間うちでは、優しい顔をしているのだらう。

それよりも驚くのは、ヨーロッパから進出したロシア人の柔軟な

環境適応性と力強さである。ロシア人のシベリア植民地化は、十五世紀から本格的に始まり、十七世紀には完了していたという。他のヨーロッパ人とは違って、土着民を支配・隷属させるといふより、

その生活様式を取り入れ、融合しながら生活圏を拡大してきた。民族間の対立は過去も現在もあるにせよ、人種差別的な視点はほとんど見られない事は注目される。

ロシアは過去も現在も大国である事には変わりはなく、国民は強いプライドを持っている。最も近い隣国が、相互に信頼される関係になるためには、生い立ちの異なる国の文化や生き方を互いに尊重して学び合う事が出発点である。今後は経済面だけでなく、文化的交流など、民間を交えた損得抜き交流が肝要であらう。

「世界少年冒険村」に集う子供たちをつれて共にあの大自然を満喫し、様々な人々、たくましい子供たちと触れ合いたいものである。



▲ハバロフスク市街の風景



▲アムール河畔に集う人々